

福 富 正 実

## 『共同体論争と所有の原理——資本論体系と広義の経済学の方法——』

未来社 1970. 11 482 ページ

本書は、人類史上継起するすべての社会構成を対象とする「広義の経済学」を、所有論を基礎として構築するために書かれた6章から成る。その素材は、マルクス主義の原典とともに、現在まで共同体をめぐる行なわれてきた諸論争であり、その議論は原始共同体社会の運動法則から社会主義への移行にまで及び、批判を加えられた学者は十指に余る。その最大の特長は、社会主義への移行の多様性（とくに、資本主義を通過しない途の可能性）を理解するために、所有論・共同体論を直接に役立たせようとする、きわめて実践的な関心であり、そして、共同体を、社会主義への未来を切りひらくための一つの拠り所として積極的に評価しようという問題意識である。このような雄大な構想を正しく理解し、かつ評価するのは容易ではない。とくに、本書の各章がほとんど独立の論文の体裁をとっていて、全体としては論点の重複が多い上に、叙述も引用が豊富すぎて読み易いとは言えないだけに、なおさらそうであり、せめて、著者の立論を要約的に示すような「結論」が付されていたなら、と惜しまれる。しかし、あえて本書の理論的骨格を要約してみれば、つぎのようである。

著者は、初期から晩年に至るマルクスの所有論を、「疎外された労働の視点」と「社会的生産過程の発展段階の視点」の二つが貫ぬいていたとみる。それらは、もちろん密接に規定しあっている「二重の分析視点」であるが、それでも、マルクスの叙述の特定の箇所や、あるいは特定の著作のうちでは、そのいずれかが前面に押し出されてくることもしばしばある。著者によって本書の叙述の出発点とされている『資本論』第1巻第24章第7節の第2パラグラフと第3・4パラグラフの対照がそれであり、また、『資本制に先行する諸形態』と『ヴェラ・ザスリッチへの手紙』の観点の相違がそれである。すなわち『諸形態』においては、「疎外された労働の視点」から、農奴制や奴隷制におけるように人間が土地の付属物となっている階級社会と対照させつつ、土地が人間の非有機的肉体としてあらわれる、階級分化に先行する本源的所有の諸類型が規定されているのに対して、

『手紙』においては、「社会的生産過程の発展段階の視点」から、血縁的・氏族的共同体→農業共同体(家父長制世帯共同体による耕作が、定期的割替に示される共同体的所有に包みこまれている段階)→新しい共同体(小経営的生産様式が取り結ぶマルク隣人共同体)という、普遍的な発展の諸段階が規定されているというのである。

この場合、もっとも特徴的なのは、やはり、著者によるマルクスの本源的所有論の理解であろう。『諸形態』におけるアジア的、古代ローマ的、ゲルマン的形態とは、著者によれば、「定住生活移行後の一定段階におけるそれぞれの民族のもとでの労働の仕方様式の違いによって規定される」、農業共同体の類型的区別であり、したがって、地理的・自然的環境による民族的特性を強く表現している。しかも、重要なのは、これら階級分化以前の諸形態が、諸民族における階級関係形成の多様性に反映されることであり、アジアにおいては、大規模灌漑農業という労働過程の特質によって、農業共同体の段階で階級国家が形成された(→アジア的生産様式)のに対して、西ヨーロッパでは、小経営的生産様式⇄私有の発生後に階級分化が進行した。そして、西ヨーロッパの内部では、小経営生産様式が共同体のうちに統一されているゲルマン人のもとで農奴制が形成されるのに対して、そのような統一のないローマ人のもとでは奴隷制が形成される、という区別が生ずると理解されている。

このように、本書にあっては、マルクスの指定する共同体の諸形態を段階的に継起する系列とだけ考える立場を批判しつつ、これに類型的に並存する系列を加えることによって、世界史により豊富で生き生きとした内容を与えようとしているのである。そのかぎりにおいて、あらゆる民族が一定の諸段階を必然的に通過すると考える硬直した段階論的立場の批判として魅力ある構想であるし、また、「地理的決定論」という非難をもおそれることなく、地理的・自然的条件の役割を再検討しようとする柔軟な姿勢は、われわれをひきつけずにはおかない。しかも、共同体をその諸段階において把握しようとする視点は、社会主義への移行において共同体が果しうる役割を高く評価する立場を基礎づけ、共同体をその諸類型において把握しようとする視点は、社会主義への移行の民族的多様性を主張する立場を基礎づけているのである。このような立場が、現在の国内的・また国際的解放運動のいくつかの重要な問題点と関連し、そこに一定の現実的基礎を持っていることは言うまでもない。

このような立場に対しては多くの批判がありうるであろうし、とくに、本書で批判の対象とされた人々による

忌憚のない反論が、多くの点にわたって寄せられることが期待される。しかし、最大の問題点は、何といたっても共同体の段階論と類型論との関連であろう。おそらく、地理的・自然的条件によって規定される共同体の現実的あり方の相違を、何らかの形で理論化しようとすることに異論はないであろう。しかし、本書においては、本源的な所有の諸形態の類型論的理解が、無階級社会から階級社会への移行を、総体的な奴隷制、奴隷制、ないし農奴制が民族的特性によって並列的に発生してくる過程として描き出す、きわめて大きな構想の根拠としての地位にまで高められているのであって、そこには大きな疑問を感ぜずにはいられない。

ここで、私自身の関心から、西ヨーロッパ封建制の例を取り上げることをお許し頂きたい。著者は、主としてソ同盟の歴史家の業績を手がかりとしながら、西ヨーロッパ封建制の成立過程を、ゲルマン人の農業共同体の中から小経営的生産様式が確立し、それに伴って「完全アロッド」という形態で私有が発生したのちに、はじめて封建的大土地所有が発生するというように整理する。そして、これが、無階級社会から直接に農奴制が形成された重要な例としての地位を与えられている。しかしながら、最近の研究動向は、西ヨーロッパにおいても、封建制が成立してくる前提として、やはり奴隷制的生産関係が存在していたことを示しているように思われる。フランス学界でいう「村落首長制」、西ドイツ学界でいう「豪族支配体制」の内容を、ただちに奴隷制と見なすことはもちろんできないとしても、これらの定式化が、前封建的な支配＝隷属関係が西ヨーロッパでも古くから存在していたことを強調した意義は、無視しえないであろう。また、メロヴィング期からカロリング期の諸史料は、西ヨーロッパ封建制の成立が、その基礎的な局面の一つとして、奴隷の農奴への量的上昇を伴っていること、封建的大土地所有の形成が、独立農民層ばかりではなく、前封建的大土地所有をも否定する過程であったことを示している。封建制以前の西ヨーロッパ社会において奴隷制が果していた役割の程度を実証的に明らかにしえない限り、これを端的に奴隷制社会と規定することはためらわざるをえないとしても、少なくとも、そこで行なわれる階級分化が主として奴隷制を発生させていたような段階の社会であったことは、確実であろう。さらに視野を拡げた場合、西ヨーロッパ封建制の成立を、奴隷制を基礎としていた古代地中海文明からの継承関係をぬきにしては、およそ語りえないことも明らかである。例えば封建制形成の基地となったロワール・ライン間地域におい

ては、封建的大土地所有は、たしかにローマ期の奴隷制的大所領との断絶の上に形成されたが、しかし、耕地など、後者の生産力的遺産を継受して成立している場合が多いのである。〔詳細については、拙稿「中世初期の社会と経済」、『岩波講座、世界歴史』7を参照されたい。〕西ヨーロッパ封建制の成立は、やはり、何らかの意味で先行する奴隷制的生産様式を前提としないかぎり、充分には理解できないように思われる。

以上の点は、階級社会への移行が奴隷制と農奴制を並列的に成立させるという立論に西ヨーロッパ封建制を引証することに対する、当面はささやかな疑問にすぎないかも知れない。しかし、この例は、硬直的な段階論の克服は、必ずしも共同体の理解において段階論と類型論を並列させることによってではなくても、あくまでも段階論を基礎とした上で、不均等発展の同時存在を媒介として、生産力⇔生産関係が異なった地理的・自然的環境のもとに継承されていく過程を構想することによっても、充分に可能であることを示しているのである。著者は「大塚史学」をしばしば検討の対象とし、その批判とくに1章をあてている。この批判は、「大塚史学」が共同体の諸形態を、1系列的・単線的に把握していることに集中されている感じがあるが、「大塚史学」に含まれている不均等発展の同時存在を出発点とする諸構想にも目を向けない限りは、批判としては片手落ちであろう。無階級社会⇔階級社会の移行における多様性を、いったいどのような理論的次元で問題とすべきなのか、より立ち入った吟味が望まれるのである。

【森本芳樹】

Д. П. Кайдалов

「労働転換法則および人間の全体的発達」

Д. П. Кайдалов, Закон перемены труда и все-стороннее развитие человека, Москва, Изд. «Мысль», 1968, 320 стр.

社会生活の社会主義的改造がなしとげられた段階では、 Kommunismusの問題は否応なしに経験的実在にかんする科学へと転生してゆかざるをえない。「分業の揚棄」とか「人間の全体的発達」とかの Kommunismusの本質にかかわる問題もまた例外ではない。それは、 Kommunismusを現実に生産しつつある人々にとっては、たんなる哲学